

和船建造技術を後世に伝える会調査報告書刊行事業

和船建造技術を後世に伝える会

はじめに

当会は、廃絶が危惧される木造和船とその建造技術の記録・収集、及び調査・研究を通して木造船そのものと、その建造技術とを後世に伝承していくことを目的に、平成 17 年より 3 か年にわたり「和船とその建造技術保存・研究事業」を実施してきた。この 3 か年で得られた成果を広く一般に公開し、富山湾周辺地域の木造和船とその建造技術の伝承と周知・普及に供するため、補足の調査を実施したうえで『とやまの和船 和船建造技術を後世に伝える会調査報告書Ⅲ』の刊行・頒布を計画した。

平成 21 年度は、その準備の年として、氷見市内に残る和船の保全作業を行ったほか、比較対象として太平洋側の和船・漁撈具などの調査を実施した。続く平成 22 年度には、現存する和船の実測・製図作業を進めたほか、和船研究者からの助言を得て報告書の執筆・刊行を行った。

『とやまの和船 和船建造技術を後世に伝える会調査報告書Ⅲ』の構成について

本書は、A4 判 144 ページ（内カラー図版 4 ページ）で、3 章より構成している。

第 1 章「富山の和船 ～富山湾沿岸地域とその周辺の海船・川舟～」では、富山湾周辺地域の海船と川舟を俯瞰した上で、各々の船については個別の検討を加えた。第 2 節では、富山県内各地域でかつてどのような海船・川舟が使用されていたのか、これまで発表・刊行された各地域の自治体史や地誌、各種の報告書・研究書などの文献に基づいて概観した。続く第 3 節では、海船を 6 種、川舟を 2 種に分類し、富山湾周辺地域の和船の船種と形態について紹介した。この第 3 節は、現存資料の実測図・写真および古写真等を中心に構成した。県内の海船については、現存資料が少なく、把握が困難な地域もあるが、大正期に富山県水産講習所が実施した調査の成果を加え、県東部の朝日町から県西部の氷見市までの資料について紹介することができた。また川舟についても資料の少なさは否めないが、オモキ造りと板合わせの 2 種に分類可能であることを示した。

第 2 章「マルキブネ（丸木船）が支えた内湾の漁業」では、富山湾の造船技術と共通する技術が用いられながら、また違った様相を見せる七尾湾の造船資料と漁撈をテーマとした。七尾湾で使用されたマルキブネは、富山湾で定置網漁の網取り船として使用されたドブネと同様のオモキ造りの技法が用いられた木造船である。第 1 節では、このマルキブネに関する大正期から昭和 20 年代にかけての資料である『脇本家資料』を紹介し、第 2 節では、マルキブネを用いた漁撈について紹介した。

第 3 章「現代に伝わる造船技術の記録 ～海船・テンマと渦舟・タズル～」では、現役の船大工で、当会の代表でもある番匠光昭氏が近年建造したテンマとタズルの造船記録を掲載した。小型の海船であるテンマは、氷見では一本釣り漁やタコツボ漁、磯見漁等に使用された船である。一方のタズルは、氷見市十二町渦で、かつて農作業や運搬、渦漁等に使用された舟である。用途や形状が大きく異なる 2 艘の船の建造の記録によって、氷見の造船技術の概略を示した。

報告書の頒布について

今回刊行した『とやまの和船 和船建造技術を後世に伝える会調査報告書Ⅲ』は、富山県内の図書館や市内の小中学校および、県内外の博物館、資料館などの研究機関・教育機関等に頒布し、広く一般の利用に供している。

また、希望者には有料（１部 1,000 円）の頒布も行っている。有料頒布は、氷見市立博物館の窓口で行っているほか、現金書留・定額小為替でも受付けている。

【有料頒布注文・問い合わせ先】

〒933-0016 富山県氷見市本町４番９号 氷見市立博物館気付

和船建造技術を後世に伝える会（Tel0766-74-8233 Fax0766-74-5520）

報告書の申し込みについて

- ・代金（１部 1,000 円）と送料（１部につき 290 円）の合計 1,290 円を、現金又は定額小為替で、氷見市立博物館気付、和船建造技術を後世に伝える会事務局までご送付ください。
（定額小為替の受取人欄等には何も記入しないでください）
- ・送料分のみ、切手でご送付頂いてもかまいません。
- ・量が多い場合は事前に氷見市立博物館までご連絡ください。
- ・『とやまの和船』希望と明記のうえ、冊数、住所、氏名、電話番号を記入したメモを同封してください。

とやまの和船

和船建造技術を後世に伝える会調査報告書Ⅲ



2011年3月

和船建造技術を後世に伝える会

序

本州の日本海側ほぼ中央部に位置する富山湾は、豊かな漁場が広がり、古くから漁業で栄えてきました。そうした漁業と漁村の暮らしを支えてきたのが木造の海船です。また、富山県内を流れる河川や水郷地帯でも、川舟が欠かせない存在でした。船大工が古来より伝えてきた技術を駆使して建造された木造の和船は、高度経済成長のなか急速に姿を消していき、現在では和船と建造技術そのものの廃絶が危ぶまれています。

平成15年に和船とその建造技術、和船を用いた漁撈習俗などを後世に伝承していくことを目的として、「和船建造技術を後世に伝える会」の活動を開始してから平成22年度で丸7年を迎えました。

この間、富山湾と周辺地域に現存する和船の現状確認と収集のほか、和船の修復や実測作業、日本海沿岸地域を中心とした他地域の和船実地調査に加えて、和船建造技術と和船を使用した漁撈作業の聞き取り調査などを実施してきました。また、平成16年度には『船をつくる、つたえる』、平成19年度には『氷見の和船』という2冊の調査報告書を刊行し、修復した和船の一部は氷見市立博物館での一般公開に供するなど、当会の調査成果の周知に努めてきました。

こうした活動を続けるなかで、当会に富山県とその周辺地域に残る実物の和船や造船用具をはじめとする関連資料が寄せられ、徐々に蓄積されてきました。現在これら貴重な資料を広く公開し、活用していく必要を強く感じています。

このたび、富山県日本海学推進機構の日本海学研究グループ支援事業の助成をいただき、「和船建造技術を後世に伝える会」の7年間にわたる調査および保存活動の報告書として本書を刊行いたしました。本書では、実測図や写真を中心に富山湾周辺地域の和船を概観し、あわせて能登半島の瀬風のマルキブネに関する造船資料や漁撈の実際、近年氷見で建造された和船の造船記録について紹介します。

本書が、富山湾と周辺地域の和船研究のうえでの基礎資料となり、消えていこうとしている和船とその建造技術に光をあてる一助になれば幸いです。

和船建造技術を後世に伝える会

例 言

1. 本書は、和船建造技術を後世に伝える会の調査報告書である。
2. 調査及び本書の刊行は、富山県日本海学推進機構より助成金を得て実施した。
3. 本書の編集は廣瀬直樹が担当し、小境卓治と小谷超が補佐した。
4. 各章の文責は各執筆者にある。また用語の統一は特に行っていない。
5. 本書の作成にあたり、多くの方々・機関からご助言・ご協力をいただいた。
その皆様のご芳名及び協力機関名は巻末に記した。

和船建造技術を後世に伝える会 会員名簿

代 表 番 匠 光 昭 船大工 番匠FRP造船

会 員 小 境 卓 治 氷見市立博物館館長

会 計 小 谷 超 氷見市教育委員会生涯学習課主査

事務担当 廣 瀬 直 樹 氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員

目 次

序

例言

和船建造技術を後世に伝える会 会員名簿

第1章 富山の和船 廣 瀬 直 樹 1
～富山湾沿岸地域とその周辺の海船・川舟～

第2章 マルキブネ(丸木船)が支えた内湾の漁業 小 境 卓 治 79

第3章 現代に伝わる造船技術の記録 小 谷 超 115
～海船・テンマと潟舟・タズル～

協力者・協力機関一覧

おわりに

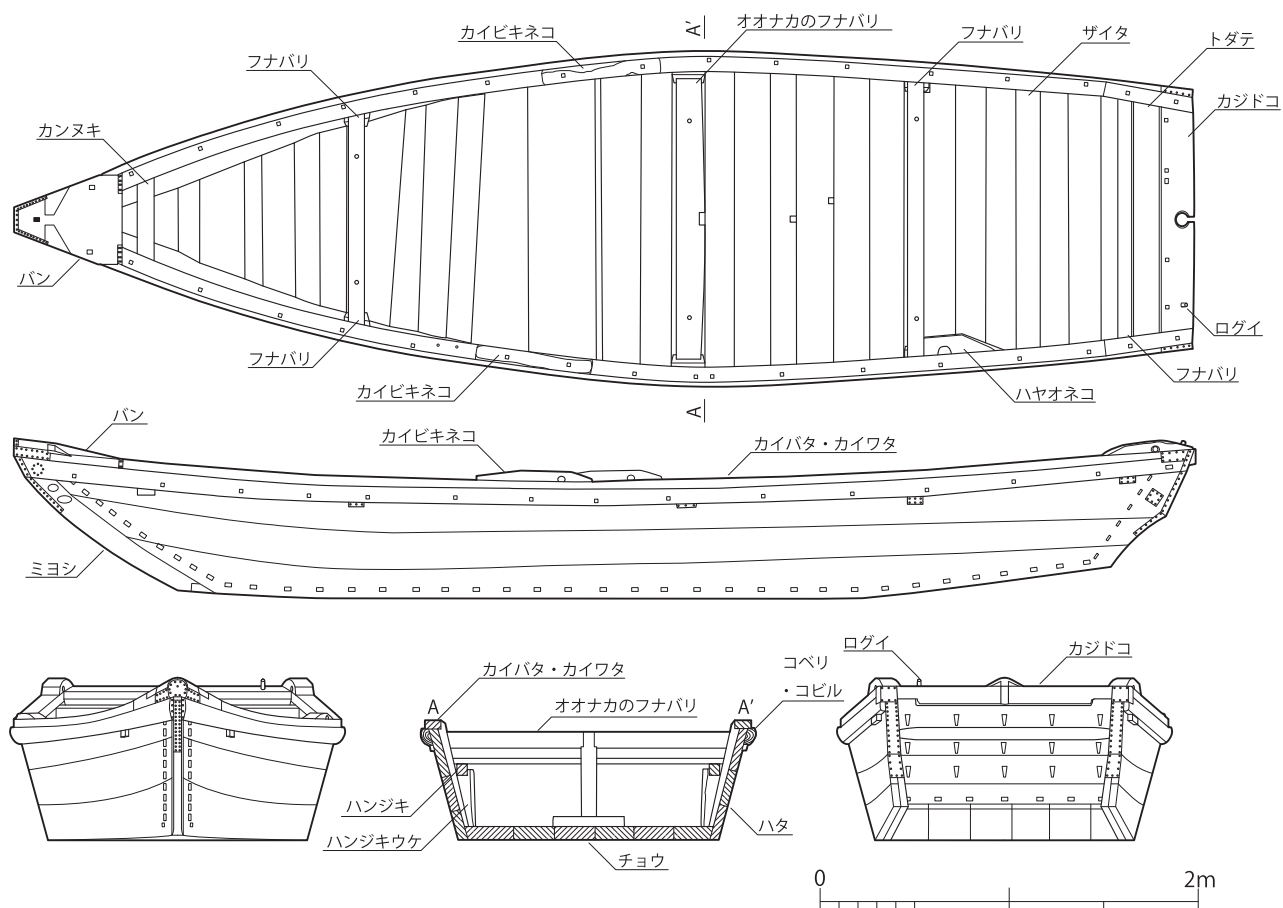
第1章

富山の和船

～富山湾沿岸地域とその周辺の水船・川舟～

廣瀬 直樹

はじめに	2
第1節 日本海沿岸地域の和船とその建造技術	2
第2節 和船の分布と名称	4
1. 富山湾周辺地域の水船・川舟	4
2. 氷見市	6
(1) 氷見浦・灘浦	
(2) 十二町潟とその周辺	
(3) 上庄川	
3. 高岡市	9
(1) 伏木・太田	
(2) 庄川・小矢部川の下流域とその周辺	
4. 東礪波郡・西礪波郡	10
(1) 庄川上流域とその支流	
(2) 小矢部川上流域とその支流	
5. 射水市	11
(1) 新湊	
(2) 放生津潟とその周辺	
6. 富山市	12
(1) 四方	
(2) 岩瀬	
(3) 水橋	
(4) 神通川	
(5) 常願寺川	
7. 中新川郡	14
8. 滑川市	15
9. 魚津市	15
10. 黒部市	16
11. 入善町	16
12. 朝日町	16
第3節 富山湾周辺地域における和船の船種とその形態	19
1. 和船の分類	19
2. 海船	19
(1) ドブネ	
(2) カンコ	
(3) テンマ	
(4) キンパチ	
(5) テント	
(6) サンパ	
3. 川舟	61
(1) 川舟の多様性	
(2) オモキ造りの舟	
(3) 板合わせの舟	
おわりに	75
引用・参考文献	76



第6図 カンコ (S=1/40) 氷見市大境 氷見市立博物館蔵



写真5 カンコ (2) 氷見市北大町 氷見市立博物館蔵

第2章 マルキブネ(丸木船)が支えた内湾の漁業

小 境 卓 治

第1節 脇本家資料にみる七尾湾岸のマルキブネ ―マルキブネ造船の実際―	80
はじめに	80
1. 「大正12年より昭和23年迄 西岸村丸木船覚え」	82
2. 「昭和18年 漁船修繕資材配給願書類」	87
3. 「(昭和20年代前半頃) 船材各部の規格と数量手控え」	90
4. 「(昭和20年代前半頃) 機械船用ボルト・船釘手控え」	89
5. 「昭和21年度 西湾漁業会漁船造修申込書(船形法式寸法控帳綴)」	92
おわりに	101
第2節 七尾湾内の漁業 ―内湾の漁撈とマルキブネ―	102
はじめに	102
1. 流れ船漁	102
昭和20年頃の流れ船漁(回り船漁)の操業	102
2. ボラ刺網漁	103
昭和20年頃のボラ刺網漁の仕組みと操業	103
3. テンコウ網漁	105
昭和10年代頃のテンコウ網(巻網)の仕組み	105
昭和10年代頃のテンコウ網(巻網)の操業	106
4. マキダオシ漁	107
昭和10年代頃のマキダオシ(ボラ巻網)の仕組み	107
昭和10年代頃のマキダオシ(ボラ巻網)の操業	108
5. ナマコ漁	108
昭和10年代頃のナマコの手曳き漁	108
昭和10年代頃のナマコの見突き漁	110
6. 手繰網漁	110
昭和10年代頃の手繰網の仕組みと操業	110
7. 延縄漁とタコガメ漁	111
昭和10年代頃の延縄漁の操業	111
昭和10年代頃のタコガメ漁の操業	111
おわりに	112
引用・参考文献	113

第3章

現代に伝わる造船技術の記録

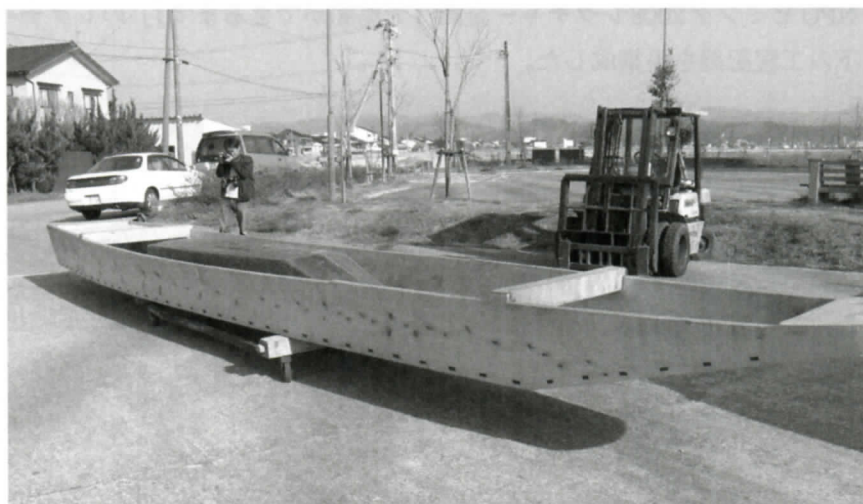
～海船・テンマと潟舟・タズル～

小 谷 超

はじめに	115
第1節 海船・テンマの造船記録	116
1. 概 要	116
2. テンマの造船工程の記録	117
第2節 潟船・タズルの造船記録	124
1. 概 要	124
2. タズルの造船工程の記録	125



海 船 テ ン マ



潟 舟 タ ズ ル

おわりに

「和船建造技術を後世に伝える会」が平成15年より継続して行ってきた活動の、とりあえずの集大成として本書を刊行します。

本書の内容は、第1章では富山湾周辺地域の海船と川舟を俯瞰し、第2章では富山湾の造船技術と共通する技術が用いられながら、また違った様相を見せる七尾湾の造船資料と漁撈を紹介しました。また、第3章では現役の船大工で、当会の代表でもある番匠光昭氏が近年建造した和船の造船記録を掲載するなど、多様なものになりました。

会の活動を始めてからの7年間の間にも、氷見の海辺にわずかに現存していた木造船が次々に姿を消していきました。一部は実測したうえで部材を資料として残すことができましたが、記録すらままならないうちに処分されたものがいくつかあります。また、県内の他地域を見渡しても、すでに失われてしまったものが余りに多いことに気付きます。

当会が収集し、あるいは寄贈や寄託を受けた和船のほか、操船具や漁撈具、造船用具など多数の資料は、現在氷見市立博物館で保管されています。すでに展示、公開している資料もありますが、大多数はいまだ収蔵庫のなかで眠った状態です。そのうち和船については、今回ようやく実測図と写真を中心に世に出すことができました。しかし、それも膨大な資料群のうちのごく一部に過ぎません。今後も会の活動を続け、これら貴重な資料を単に保管するだけでなく、広く公開してより良い形で後世へ伝えていくという責務を果たしていきたいと念じています。

終わりにになりましたが、調査および本書の刊行にご協力をいただいた多くの皆様方に、この紙面をお借りして衷心より感謝申し上げます。

(廣 瀬)